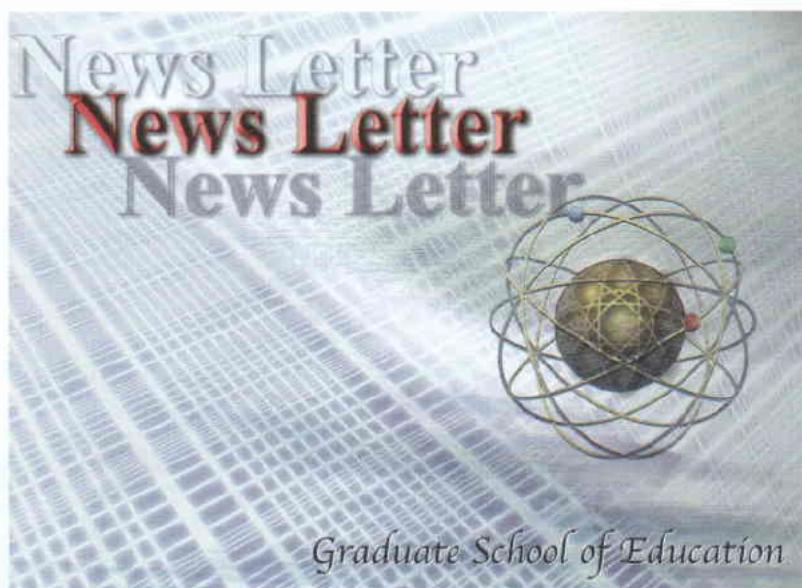


京都大学 大学院教育学研究科 / 教育学部

No. 15

2007.12



(目次)

● 卷頭言

黒板への愛：かたちのもつ力 副研究科長 矢野智司 2

● 研究ノート

教員から（おもいは創造、おもえば定年）・ 臨床実践指導学講座 教授 藤原勝紀 3
院生から 心理臨床学講座 博士後期課程 2 年 梅村高太郎 3

● グローバルCOEの拠点形成

..... 教育認知心理学講座 教授 拠点リーダー 子安増生 4

● 大学院教育改革支援プログラム（大学院GP）採択

..... 心理臨床学講座 教授 桑原知子 4

● 社会人院生から 教育科学専攻（専修コース）修士課程 1 年 生駒佳也 5

● 事務室から 専門職員（教職課程担当） 片山 正 5

● 図書室から

ある図書館員のひとり言 図書掛 福井京子 6

● 臨床教育実践研究センターから

..... 臨床教育実践研究センター助教 片畠真由美 6

● 助教室から

研究科が提供する電子的なサービスの紹介 情報関連 助教 中池竜一 7

● 教育実践コラボレーション・センターから

..... コラボレーション・センター関連 助教 安川由貴子 7

● 留学生から

日本の小学校の印象 教育社会学講座 研究生 ジュディット・リナレス・マルティン 8

● 諸記録

①入試結果 ②学位授与件数 ③人事異動 ④招へい外国人研究者等の記録 8~9

⑤寄附金受入 ⑥受託研究受入 ⑦ オープンキャンパス2007開催

● 諸報

計報 9~10

新任教員、事務員紹介

卷頭言

黒板への愛：かたちのもつ力

副研究科長

矢野智司

黒板に何を描きだすのか描きだすわたしにもわからない。授業の前に準備はしていても、毎年、授業の展開のなかで準備していたものとは異なる流れとなるため、思いもしなかったトピックが呼びだされ、黒板に書くことはわたしにも予測ができないのだ。授業は一回性の強いパフォーマンスとなる。「これがわたしたちの生きている意味の世界」と語りながら、わたしは大きな円を黒板に描きだす。このとき、それを見ている学生もその身が描き手のわたしと同期する。学生はこの円が示しているわたしたちの意味にくるまれた世界と、この円の世界の外に広がる非知の世界を理解できただろうか。この円をわたしはそれだけの力をもって描くことができただろうか。しかし、少なくとも描くわたしを注視し、その身でもって学生が円を描くときには、何事かが生じたはずだと考える。その意味では、黒板は聞き手が参加する度合いが強いメディアのように思われる。黒板が発明されて一斉授業が可能となった。先生が黒板に書く文章や図を、学生が書き写すことによって思想は伝達されていく。

ところが、わたしが学生のときに受けた授業には、先生が自分のノートを読み上げた文章を、ひたすら自分のノートに書き写すというものがあった。先生はほとんど黒板を使わない。ときどき難しい言葉があるときには黒板に字を書く。いまから見れば、誰かまじめな学生からノートを借りて、そのノートをコピーすればそれですむように思うかもしれない。もし情報の伝達ということだけ見るのなら、あまり効率のよい授業でないのかもしれない。しかし、ただ授業でひたすら書く作業は、それほどいとわしいものではなかったように思う。その授業の内容は、そのようにするのがふさわしかったのかもしれない。声を聞きそれを文字にうつす修行のような行為は、90分続けるとそれなりの充実感と悦びがあった。そのノートはいまも大切に持っている。

わたしたちは思想を他者に伝えようとするが、そのときに伝えるメディアの種類や時間や空間の制約が枠組みとなって、その思想の内容を規制している。そのように考えると、反対に伝える思想の内容によってメディアの種類や時間や空間の枠組みが選ばれる必要がある。

わたしが所属する学会の発表時間はだいたい20分ぐらいである。400字詰め原稿用紙でいえば15枚から17枚程度だろう

か（もちろん早口で話すと決めれば20枚も不可能ではないだろう）。それだとある思想の一局面を語ることができるものにすぎない。大学院生にはそれでもよいかかもしれないが、これまで研究を積み重ねその上に立ってもっと深く話したいものとしては、学会発表には魅力がない。この発表時間を60分にすると、語るべきテーマも文体も変わってくるだろう。ところで、授業時間はいま90分だが、これはどのような根拠に基づいているのだろうか。

パワーポイントによる発表に接する機会が増えているが、わたしは使ったことがない（本当は使えない）。パワーポイントは科学のような機能的な情報を伝えるときには大変便利である。また図や写真あるいは動画も見せることができるので、ヴィジュアルに直接的に伝えることができる。またコンパクトに用意した資料は何度も反復可能であり、またそれをつなげて編集していくれば、それを論文にしたりすることも可能である。しかし、視聴者としての経験でいえば、日常の次元と異なる思想を伝えるには、パワーポイントはそれほどよいメディアとは思えない。ある場面（次元）とある場面（次元）との関係をどのようにつなぐのか、思想のダイナミズムが發揮されるところなのだが、パワーポイントではそのことが曖昧にされる場合が多いように思われる。人がパワーポイントで発表するときには、わたしはその関係に注目して聞くことにしている。たいていそこに発表された思想の問題点があるからだ。

この数年、自己点検・評価委員をしているが、授業評価の一つに授業にパワーポイントのような機器を使用しているか問うのがある。これはそのような機器を使用しないという要請である。新しい機器（メディア）はある可能性を開きもするが、違う可能性を閉ざしもしている。いったい何を開き、何を閉ざしているのか、教育の研究者として考えていきたい。



研究ノート

○教員から

おもいは創造、おもえば定年

臨床実践指導学講座 教授 藤原勝紀



平成8年(1996年)12月1日に赴任しました。阿波踊りの故郷から、祇園山笠の博多で33年、祇園山鉾のまち京都で11年です。大学教員として九大22年、京大11年、計33年と語呂あわせでの勤めでした。平成20年3月に定年退職です。ちょうど40年来の不思議なご縁と巡り合わせで故河合隼雄先生の追悼式を迎え、最近には親不知を抜歯したりするうちに、やはり人生の大きな節目の時なのだと実感するこの頃です。

おもえば赴任早々の附属臨床教育実践研究センター設置、臨床実践指導学講座の新設、そして大学法人化の前後は研究科長として極つけの慌ただしさでした。研究科国際シンポジウムの開催は嬉しかった。還暦後は、専門的教養知研究など学問の府の住人らしくと心がけて過ごさせて頂いた。この間は、いろいろと厄介をお掛けした日々を考えながら、数々の教員仲間はもとより学生諸君との貴重な出会いに感謝する暮らしだす。とりわけ歴代の事務長はじめ職員の方々の温かな眼差しに支えられたことを痛感しています。自由の学風ならではの風土に包まれた心

に残る京都大学生活でした。
ほんとうにお世話になりました。

世代も顔触れも変化し、研究教育プロジェクト面でも画期的な展開が図られ、いまや教育といえばわが研究科という自然で確固とした発展に触れるにつれ、総力挙げたご尽力に敬意を表しながら、教育研究風土の活性化を味わっています。しかし、学生も教職員も大変お忙しく、ちょいと一杯と誘うのも悪いようなこの頃だけに、ときには総長裁量による玄関脇の庭のベンチで談笑したり、紅葉の錦に和んで欲しいなど切に願っています。

幾多のことがありましたが、相応に存分に駆け抜けさせて頂きました。私は極めたい研究課題がいよいよ山積です。今後とも宜しくお願いします。まだ退職挨拶には早い気もしますが、心より関係各位のご健勝とご活躍を祈りながら、お礼を申し上げて結びます。

院生から○

心理臨床学講座 博士後期課程2年

梅村高太郎



私にとって大学院生になってからの5年間は、研究活動に勤しんだ時間であったと同時に、駆け出しの心理臨床家として、臨床教育実践研究センターの心理教育相談室や学外の様々な臨床現場での実践に心血を注いだ年月もありました。その研究と実践の日々の中で感じたのは、心理臨床において研究と実践は切っても切れない関係にある、ということです。研究が臨床実践に照らしてみて意義を持つものでなければならない、という意味ではもちろんのこと、研究が「物事を詳しく調べたり、深く考えたりして、事実や真理などを明らかにする」(『大辞泉』より)ものであることを考えれば、日々の実践そのものにとって、そうした“研究”的な営みが必要不可欠のものだとも言えます。

私は、「心理療法における動き」をテーマにして研究を行っています。面接の中でクライエントから語られる夢、プレイセラピー

の中で展開される遊び等は、極めて日常的な視点からは、クライエントの問題や苦しみの解決にとって何の意味も持たない、ただの夢やただの遊びとして軽んじられ、見過されてしまうこともあります。また、無批判に慣習的な心理学的理解があてはめられることで、本来そのものの内に潜む“動き”が捉え損なわれ、十分に展開される機会を失ってしまうこともあります。実践において心理臨床家に必要とされるのは、こうした素朴な見方を否定し、心理臨床の場で生じてくる現象の深みにおける“動き”を見通していくことではないかと思います。そのように“動き”をまなざし、受け取る心理臨床家の存在によって、ただの遊び、ただの夢という静的な出来事が、治療的な力をもって動き出すことができるのではないかでしょうか。

このような問題意識をもって、一つ一つの臨床事例に学び、臨床事例から考える“研究”を、これからも弛むことなく続けていきたいと思っています。

◎グローバルCOEの拠点形成

教育学研究科教授、拠点リーダー 子安 増生

教育学研究科から申請していたグローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」が採択され、今年から平成23年度までの5年間、このプロジェクトを実施することになりました（<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>）。

「21世紀COE」の後継プロジェクトである「グローバルCOE」は、大学院教育の活性化のため、「国際化」と「人材育成」をキーワードにして企画されました。今年度の採択は、全国で5分野63拠点（京都大学は6拠点）、そのうち人文科学分野は12拠点という大変狭き門でした。私どもの拠点は、「21世紀COE」「心の働きの総合的研究教育拠点」（文学研究科）ならびに「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「理論・実践融合型による教育学の研究者養成」（教育学研究科）という2つのプロジェクトの経験ならびに実績と、実証学・実践学・臨床学を柱とする心理学分野および教育学分野（文学研究科、人間・環境学研究科、高等教育研究開発推進センター、こころの未来研究センター等の関連教員を含む）の有機的連携のプランが評価されたものです。

拠点設置の趣旨を一言でまとめるならば、次のようにになります。



「心が活きる教育ということについて心理学・教育学の観点から深く考えることのできる高度の専門性と幅広い視野を持ち、

外国語による論文の投稿や国際学会での発表など、国際的に情報発信ができる人材を育成するために、心理学・教育学の大学院教育を拠点全体で担う教育体制を一層整備・充実する。世界の研究機関との間に築いてきた学術交流協定に基づく教育・研究活動をさらに展開し、京都大学を世界中の心理学・教育学の研究者が研究の発展を求めて集まる拠点としていく。」

拠点の旗印である「心が活きる教育」ならびに「幸福感の国際比較研究」は、いずれも簡単な話ではありませんが、学術的にも社会的にも大変重要であり、研究者としてやりがいのあるテーマです。広く社会に開かれた拠点とし、多くの方にご参加ご協力いただきたいと思いますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

大学院教育改革支援プログラム（大学院GP）採択 ◎



心理臨床学講座 教授 桑原 知子

このたび、教育改革に関わる表記のプログラムが採択されました。プログラム名は「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」というもので、副題として「京大型臨床の知創出プログラム」と銘打たれています。これまで、教育学研究科では、与えられた問題に適応する能力だけでなく、錯綜した諸事象のなかから問題を問題として自ら確定し、さらにその問題に具体的・創造的に対応できるような、メタレベルの能力の養成に努めてきました。「臨床の知」は、関係性（生きたつながり）のなかで事象をとらえていくうとするもので、人間に関わる「教育」や「心理臨床」にとっては、不可欠の視点といえます。

今回のプログラムでは新たに、優れた専門家・実践家との交流プログラムである「トップランナープログラム」、実践的な知とは何かを、具体的なフィールドでの実践を通して学ぶ「フィー

ルド・実践プログラム」、フィールドを院生自ら発見し、そのなかで自ら知を創出する経験をもつことを目指す「ボトムアッププログラム」が企画されています。さらに、以上のプログラムが有機的に統合されることで、これらの諸経験と心理学・教育学ならびに人間諸科学の理論とが、「臨床の知」として統合されていく「臨床の知プログラム」が策定され、これによって、実践の技量を高度化していくプロセスを支援するとともに、「臨床の知」を具体化し、それを国内・外に発信していくような院生を育てようとするものです。

教育科学と臨床教育という2専攻をもつ教育学研究科は、まさに「科学の知」と「臨床の知」という二つの柱からなる研究科と言えます。今回のプログラムを遂行することによって、この両者の知が統合され、かつ、京大という個性が生かされた人材が輩出され、「学界ならびに社会に貢献する高度な人材」を生み出すことができるならば、教育者としてこれに勝る喜びはないと思っています。

社会人院生から

教育科学専攻 修士課程(専修)1回生

生駒 佳也



高校の教員を休職して院生となりました。しかし、入学前には京都大学のように社会人に門戸を広げていても、教員が教育を学ぶことさえ難しい現実に出会いました。入学して早くも半年以上たちましたが、ここに来ないと出来ない経験や考え方、さらには何より自分のこれから的人生を見直す機会を得られたと実感しています。

最初は、高校で担当していたクラスの卒業生たちと大学で出会うことに新鮮な喜びを感じていましたが、今では、図書館が閉まった後に彼ら彼女たちが教育の研究室に来て、一緒に勉強することも日常となっています。また、高校の教員・保護者・生徒が京都大学に訪れて、前平先生から生涯学習や人権問題の講演をしていただくこともできました。学生課の方々と共にシニアキャンパスのスタッフとして働いたり、コラボセンターで童仙房の活動に参加できることもいい経験となっています。

しばらく大学から遠ざかっていましたが、改めて来てみると(慌

ただしい毎日に追われてはいますが)、異なる視点から社会や教育のあり方を再考することができます。何より教育作用自体を考え、疑うことができるのは、多様な価値観の中に身をおいてないと難しいことでした。以前に歴史学を専攻したことから、教育史の中で戦後の教育を再考してみようと思っていますが、講座枠に縛られない(縛ってもらえない?)専修の利点を生かして、生涯教育や教育社会の枠組みも吸収したいと欲張っています。

「因果の偏愛」に陥らないよう、教育という現実的で具体的な作用にある矛盾を俯瞰できるようになりたいと思います。やがては学校教育の現場に帰ることになりますが、決して現場で役立たないような経験と知識を獲得したいと、さらに欲張っていきたいです。

事務室から



専門職員(教職課程担当)

片山 正

昨年の4月に教育学部にお世話になりました。1年6ヶ月が経ちました。教職科目・教育実習・介護等体験に関する事務を担当しております。

本学では、毎年約200名の学生さんが母校等で教育実習を行い、また、中学校の教員免許状取得志望者約100名の学生さんは、原則として出身都道府県の特別支援学校及び社会福祉施設で7日間の介護等体験を行っております。

この介護等体験は、「教員が個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する知識を深めること」を目的として、平成10年度入学生から、小学校・中学校教員免許状取得志望者に福祉施設等で障害者や高齢者に対する介護・介助等の体験が「介護等体験特例法」により義務づけられました。

教育実習については、参加申込後の辞退者が毎年多く見受けられます。しかし、この介護等体験は義務化されたとはいえ、本学では単位付与しておらず、また、学校・施設から指定された期間を原則として変更できないにも関わらず辞退者もほとん

どなく、毎年多くの学生さんが授業・課外活動の時間を割いて、福祉施設等で児童生徒・入所者のお世話をしようと参加されることに頭が下がります。

体験終了後の感想文には、児童・生徒・入所者の方々の一生懸命生きておられる姿、教員・施設職員さんの介護に対する強い熱意に感動した等々、今後の自分の人生において有意義な体験になったという感想がほとんどです。

介護等体験の申込方法は、都道府県毎に異なり、学校・施設・期間の決定までには数回の手続きを行わなくてはなりません。この煩雑な事務手続きに正直なところ閉口したくなりますが、感想文にみられるように、介護等体験が学生さんの今後の生き方に必ず活かされると思うと、煩雑な事務手続きの苦も薄れ、学生さんがどう成長するのかと、あれこれ思いを巡らすことでも、最近、楽しく感じるようになってきました。

今後も側面からではありますが、学生支援に努めていきたいと考えておりますので、よろしくお願ひいたします。

図書室から

ある図書館員のひとり言

図書掛 福井京子



コンシェルジュという職業をご存知でしょうか。簡単にいうとホテルのよろず承り係です。仕事は多岐にわたり、レストランの案内、航空券の手配、旅行のプランニング、ビジネス文書の作成、また、長期滞在のお客様の話し相手などお客様に心地よく過ごしてもらえるようにサポートする仕事です。コンシェルジュ(c-oncierge)の語源はラテン語のコンセルブス「奴隸仲間」やフランス語のコムテ・シェルジュ「ろうそく担当の伯爵」など諸説ありますが、やがてこれが鍵の管理者・門番を示す言葉として普及しました。ホテルのコンシェルジュは19世紀後半ヨーロッパで誕生し、ホテルの入り口でお客様をお迎えして鍵を渡す役目の人間を配置したのが始まりです。そしてさまざまな手配などを取り扱うようになり、現在のようなプロのサービス担当者になっていったのです。

そのコンシェルジュを図書館に配置している事例が日本にあるのです。それぞれ、新しい図書館としてオープンしたのをきっ

かけにして、全国ではじめて東京都千代田区の区立千代田図書館が2007年5月7日に、2番目として新潟市中央区に新潟市立中央図書

館が2007年10月1日に誕生しました。そこで大学図書館にもコンシェルジュのような、よろず承り係りの図書館員「なんでも聞いてください。どんなことでも、できるだけ満足のいくように一緒にみつけていきましょう」というのがあってもいいのではないかと思っています。ヨーロッパの老コンシェルジュたちはみんな「このコンシェルジュにならどんな頼みごとをしても大丈夫」と思わせる頼もしさを醸しだしているそうです。この頼もしさを図書館員もちたいものです。

利用者のみなさんに、質問してみようと思ってもらえるには、利用者の期待を裏切らない誠実さとつねに研鑽し続ける姿勢が必要です。このような自覚をもって生きたいと思っています。

臨床教育実践研究センターから



臨床教育実践研究センター 助教

片畠 真由美

平成9年に設立された臨床教育実践研究センターも、はや11年目を迎えました。センターは、心理教育相談室での活動を基盤にしながら、社会に開かれた機関として、一般の方、学校現場に関わっておられる教師や専門家のための研修を積極的に行ってています。その中で、公開講座とリカレント教育講座という大きな事業を毎年継続して開催しています。

公開講座は、センターが招聘している外国人客員教授を講師として行っているもので、心理臨床の立場からこころの問題に関するテーマで、心理臨床専門家および市民一般を対象として開催しています。今年度は、「イメージにあらわれる『文化』と『意識』—光と影の象徴表現」というテーマで、4月より着任されましたシェリー・レンム・シェファード先生(箱庭療法家)にご講演いただきました。この講座は、世界的に活躍されている専門家の講演を聞くことができる貴重な場であり、参加者から毎年好評をいただいております。

リカレント教育講座は、学校教育現場等で子どもに関わる専

門家を対象としており、心理臨床や医療、司法、教育、福祉など多領域の講師をお招きし、「心の教育」について検討を行う場を提供しています。昨年度は、「『心の教育』を考える—子どもの育ちと身体ー」というテーマで開催されました。

センターの実践研究の基盤である心理教育相談室においては、京都大学附属病院小児科や精神科、遺伝子診療部など医療機関と連携した相談活動を進めています。医療の発展により身体疾患の早期発見や遺伝子にまつわる素因の解明が急速に進歩を遂げる中で、こうした状況におかれる人々や家族に対する心理面からのサポートはますます重要性を増しています。こうした要請に応えるべく、医療機関との連携や、相談室のみならず医療機関に臨床心理士を派遣しての相談活動を行っています。心理臨床は、医療や福祉、教育、司法、産業等、さまざまな分野と密接にかかわっています。今後もこうした幅広い分野と積極的に連携し、活動を行っていく所存です。

今後とも、臨床教育実践研究センター、および心理教育相談室の活動にご支援賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

助 教 室 か ら

研究科が提供する電子的なサービスの紹介

情報関連助教 中 池 龍 一

今回は、研究科が提供する電子的なサービスについてご紹介します。

まず電子サービスの中心となるのは、**教育学研究科ホームページ**^[1]です。HPは、入学希望者向けの情報提供や、各種研究プロジェクト・教育プログラムの広報、研究科が主催するシンポジウムの案内など広報的な役割を果たしています。

また外部向けだけでなく内部向けの情報サービスも、教務掛の全面的な協力のもとに充実しつつあります。

たとえば、すでにご存じの方も多いと思いますが、研究科棟入口掲示板に掲示した内容を研究科HPで確認することができます（**教育実習・介護等体験等掲示や授業休講情報**^[1]）。

そして最近、**教室予約システム**^[2]の運用を開始しました。教室予約システムを使うと、本研究科の教員は研究室から空室状況確認と教室予約が可能になります。あまり教室数が多いとは言えない本研究科ですが、このシステムを活用することでより効率的な教室利用がなされることを期待しています。

加えて、まだβ版ではありますが、**研究室業績管理システム**^[2]も仮運用を始めました。研究室メンバーの論文・学会発表・書籍などの業績を蓄積し一般に公開することで、研究者・研究室

紹介に役立つと考えています。まだ運用を開始したばかりで登録がさほどありません。院生の皆さん、ぜひご協力ください。

その他にも、研究科のeラーニング推進のため、授業用ホームページ作成支援システムである**Moodle@京大教育**^[3]を提供しています。現在は、研究科のいくつかの授業で資料のダウンロードやレポートの出題（および学生からレポート提出）、授業外の時間における電子掲示板を利用したディスカッションなど、通常の授業に付随する形で利用されています。

いずれのサービスも、外部向けには「より開かれた教育学研究科」、内部向けには「より利便性の高いサービス」を目指しています。まだ開始したばかりで若干不備のあるサービスもありますが、学生生活・研究生活に積極的に活用していただければと思います。

[1] <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/>

[2] <http://lms.educ.kyoto-u.ac.jp/db/>

[3] <http://lms.educ.kyoto-u.ac.jp/>



教育実践コラボレーション・センターから

コラボレーション・センター関連助教

安川 由貴子



教育実践コラボレーション・センターとしての活動が始まって、早8ヶ月が過ぎました。本センターは、京都大学大学院教育学研究科の「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」を推進すべく2007年4月に新設されたセンターです。6月のセンター立ち上げ企画の公開シンポジウムでは、学内外から多くの方の参加をいただきました。センターの柱でもある3つのユニットにおいては、今年度も活発な活動が展開されています。「学校教育改善ユニット」の京都市立高倉小学校や寝屋川市立田井小学校では、院生が定期的に学校に通い、授業作りに関わっています。「新しい教育関係ユニット」の京都市立洛風中学校では、心理臨床的なカンファレンスに教員や院生が参加する一方で、教育人間学が専門の教員も一緒に参加する機会をもつなど、異分野のコラボレーションが実現しつつあります。「教育空間創造ユニット」の京都府南山城村の野殿・童仙房地域では、地域通貨「チャオ！」を導入した取り組みや、農業体験、エクステンション講座等を地域の方と協働で行なっています。活動は3つのユニットだけに限りません。最近では、本センターとして共同のアプローチをしていくのではないかという新しいフィールドと

の関わりも出てきています。また、10月からは院生主体の探求科目である研究開発コロキアムも始まりました。国際関係では、11月に北京師範大学の教員・院生11名が来日され、「日中教育学系合同シンポジウム2007」が開催されました。12月には日中共同教育センターとの共催で公開シンポジウム「日中教育課程改革の動向」も開催されます。

これらを通じて教員や院生同士の講座を超えた関わりが生まれ、自分の専門分野の相対化や独自性の再確認など、教育学をより広い視野から捉えなおすきっかけになっています。また、本センターで一緒に関わせていただく中で感じるのは、やはりフィールドとの関わりです。ゆっくりあせらず、長期的な視野をもってお互いに意見交換しあうプロセスを大事にできることが大切なことではないかと感じています。また、上記のフィールドは単にフィールド調査ということではなく、関わることによって実際に事が動き、共に創っている場であります。この醍醐味を感じる一方で、そのことに対する責任や自覚をもつ必要性も実感しています。フィールドと関わるということは人と関わるということでもあります。今後ますます、教育実践に関わる様々なコラボレーションが実現していくことを願っています。

留学生から

教育社会学講座 研究生 ジュディット・リナレス・マルティン

私は、去年の10月にスペインのバルセロナから来た留学生です。外国留学は二度目で、以前はバルセロナ大学教育学部在学中に1年程、オランダに留学していました。そこでは、Montessori派の小学校で参与観察をする機会に恵まれ、貴重な経験をしました。帰国後、全く文化の異なる国の事を勉強したいと思い、バルセロナ自治大学の東アジア学部で、日本の歴史・伝統・文化などについて学びました。それがきっかけで日本に興味を持つようになりました。日本の教育制度について勉強したいと思うようになりました。

ヨーロッパの社会では、日本の教育制度はとても機能的に有効性が高く、学生にきちんと準備をさせて社会へ送り出すというイメージが抱かれています。しかし、学生自身が社会をどのように見ているかということについてはあまり知られておらず、自分自身でそれについて勉強してみたいと思いました。

日本の小学校の印象



現在は教育社会学講座の研究生として、京都市立錦林小学校で、1年生のグループ観察のフィールドワークを通して日本の小学校における社会化過程について研究しています。

スペインと比較すると、日本の小学校の児童は非常に早熟です。6歳の児童が自分ひとりで学校に通えること自体もそうですが、他にもホームルームで毎日「朝の会」と「終わりの会」があることや、自由に発言できること、児童たちが昼食のときにみんなで協力して準備していることなど、驚かされることが多いです。みんな遊んでいるときには無邪気で可愛いのですが、時々小さい大人のように感じることもあります。私からみると、日本の小学校の雰囲気は、楽しく生活しながらいっぱいの事を学ぼうとしているという感じがとても印象的です。

○ 諸記録 ○

◆平成20年度入試結果

・教育学部

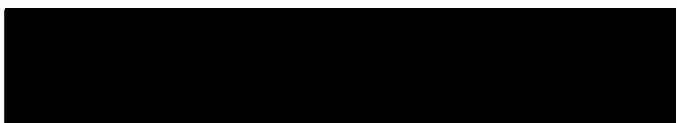
日程等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程文系	50				
前期日程理系	20				
第3年次編入学	10	23	21	7	

・教育学研究科

課程等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士 修養成コース	教育科学専攻	18			
	臨床教育学専攻	14			
課程	教育科学専攻(専修コース)	10	40(1)	38(1)	10
	臨床教育学専攻(第2種)	若干名	2	2	0
博士後期課程臨床教育学専攻 (臨床実践指導者養成コース)	4	8	8	2	
博士後期課程編入学	若干名				

()内の数は外国人留学生で内数

◆人事異動(H19.4.2~H19.10.1)



○平成19年9月1日付け

西平 直 教授 臨床教育学講座 採用
(東京大学大学院教育学研究科准教授から)

◆ 招へい外国人研究者等の記録

招へい外国人学者

○ 氏名 現職 活動内容 受入講座 受入教員 受入期間	Cave Peter (ケイブ ピーター) マンチェスター大学・准教授 現代日本の教育改革の現状：教育現場の調査を通して 教育社会学講座 稻垣 恭子 教授 19. 8. 23 ~ 19. 12. 22	○ 氏名 現職 活動内容 受入講座 受入教員 受入期間	Towse John Nicholas (タウス ジョン ニコラス) ランカスター大学心理学部・准教授 作動記憶容量の新しい測定方法に関する国際共同研究 教育認知心理学講座 齊藤 智 准教授 19. 10. 10 ~ 19. 11. 12
○ 氏名 現職 活動内容 受入講座 受入教員 受入期間	劉 蕙珍 (リュウ ケイチン) 北京師範大学教育学院高等教育研究所長・同学院副教授 日本国立大学法人制度分析 生涯教育学講座 渡邊 洋子 准教授 19. 9. 12 ~ 19. 9. 28		

◆ 寄附金受入

寄附金の名称	寄附目的	寄附者	研究担当者
広告のソース記憶の促進・混同に及ぼす懐かしさ感情の効果	広告のソース記憶の促進・混同に及ぼす懐かしさ感情の効果	財団法人 吉田秀雄記念事業財団	楠見 孝 教授
国際シンポジウム開催「東亜経典と文化」	京都大学における国際シンポジウム開催費	国立台湾大学文学部 黃 傑教授	辻本 雅史 教授
マルチメディアコミュニケーションにおける第一印象形成過程:感性情報が及ぼす効果の研究助成	マルチメディアコミュニケーションにおける第一印象形成過程:感性情報が及ぼす効果の研究助成	財団法人 大川情報通信基金	楠見 孝 教授
心の高次制御機能に関する国際シンポジウム	心の高次制御機能に関する国際シンポジウム	財団法人 京都大学 教育研究振興財団	子安 増生 教授

◆ 受託研究受入

委託者	研究題目	研究担当者
独立行政法人 教員研修センター	教員研修モデルカリキュラム開発	西岡 加名恵 准教授
文部科学省 初等中等教育局	新教育システム開発プログラム	高見 茂 教授
国立精神・神経センター	筋ジストロフィーの療養と自立支援 のシステム構築に関する研究	藤原 勝紀 教授

◆ オープンキャンパス2007開催



平成19年8月9日(木)、10日(金)の両日、「京都大学オープンキャンパス2007」が開催された。

本学部においては、8月9日(木)12時30分から実施し、273名の参加者があった。

当日は、川崎良孝学部長の歓迎の挨拶、高見茂教授の模擬授業、授業担当教員との意見交換、各系の説明と質疑応答が行われ、会場は参加者の熱気にあふれた。また、終日、学生相談員、教員、教務掛担当者が個別相談にあたり、参加者からは多くの相談が寄せられた。

諸報

計報

河合 隼雄 (京都大学名誉教授)

河合隼雄先生は、7月19日に逝去された。享年79歳。昭和27年3月京都大学理学部数学科卒。天理大学教授、京都大学教育学部助教授を経て昭和50年教授(臨床心理学)。

平成4年停年退官。のち国際日本文化研究センター所長、文化庁長官を務められた。臨床心理学において優れた研究業績を残され、さらに日本の教育改革や文化の面においても多大な貢献をされた。また、9月2日に国立京都国際会館において、先生がご希望されていた音楽葬(ブームス弦楽六重奏曲)のなか、2,000名以上の参列者による追悼式が行われた。



◆新任教員・事務員紹介（「 」内は本人の抱負）



～編集後記～

「ニュースレター第15号」をお届けします。教育学研究科では今回の内容にあるように、グローバルCOEプログラムと大学院教育改革支援プログラムが始まりました。また、教育実践コラボレーション・センターも軌道に乗りだし、このように新たな3本柱の事業が加わりました。どれも教育科学と臨床教育学の融合が研究・教育・実践において必須の内容であり、当研究科の特徴が充分に出ていると思われます。これらの成果を少しでも外へ発信していく重要性を考えると、この「ニュースレター」の役割も見逃すことはできません。以上誠に喜ばしいことですが、教育学研究科の規模が大きくなるにつれて、それらを運営する人材、組織力そして実際の建物（部屋や講義室など）が確保されることも大切です。これから様々な問題や課題が出現するでしょう。心の余裕を持って準備しておきたいものです。

(Y.K.記)

京都大学大学院教育学研究科 ・教育学部広報委員会

委員長 稲垣 恭子 教授(教育社会学講座)
委員 川崎 良孝 教授(教育研究科長・教育学部長)
委員 遠藤 利彦 准教授(教育方法学講座)
委員 角野 善宏 准教授(附属教育実践研究センター)
委員 千代 進一 事務長
委員 新堂 利博 専門職員(総務掛長)
委員 前田 勝 専門職員(教務掛長)

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075(753)3003